
自分にとっての安寧の都市について

第三期生 板倉聖起 (奈良市会計契約部技術監理課)

2012年度の第三期履修生として、安寧の都市ユニットに1年間お世話になりました。正直、「安寧の都市」は東京のような設備の整った大都会であると考えておりました。具体的には、最先端の医療、便利な都市機能、充実した保養施設、インフラが整備された不自由のない環境こそが「安寧の都市」であると。

したがって、われわれの目的は、各地方をどのように大都会化(東京化)させるのかを求めるものであると思っておりました。

しかし、見方を変えて、たとえば長寿にテーマを置くと、理想とされる地域は変わって、長野県が男女ともに長寿1位となります。最先端の医療があるはずの東京都は、男性11位・女性22位です。「安寧の都市」に対して疑問が生じた私は、ユニットに参加いたしました。

もっとも衝撃的で印象的だったのは、現地研修で大阪市の介護施設を訪れたあとでのことです。後日、現地研修をテーマに討論がありました。私も含めて多くの履修生は、便利で機能性の高い清潔なその施設に満足しておりました。しかし、ある先生から異論が出ました。「要介護者に居住制限がある。自由な意思で移動できない」と。本来の安寧の意味に疑義が生じました。人は長生きしたから幸福とはいわない。これまでの自分の考えにないものを感じました。

人によって「安寧の都市」の定義が違ってもかもしれませんが、自分にとっての「安寧の都市」を探してみたいと思います。

安寧の都市ユニットという学び

第四期生 小菅謙次 (京田辺市市民部税務課)

いま、社会人の「学び直し」が増えているように思う。社会人としての経験をいかしながら新たな知識や技術を習得することで、職業能力を高めたりするきっかけにもなるからだろう。社会人だった私も、ふたたび学ぶことへの意欲が湧き、その機会を探していただけに、安寧の都市ユニットはまさに「学び直し」の場になると考えて、飛び込んだ。

ユニットでは教員と履修生との距離がとても近く、「互学互習」によるカリキュラム編成となっている。なかでも特徴的なのは対話の講義だ。ここでは、現代社会がかかえるホットなテーマについて議論するが、ときがたつにつれて、社会人経験を通じた実践的な話に発展する。同時に院生からも鋭い質問が飛び交う。その掛けあいがなんともいえない。私にとって職場が日常的な風景なら、ユニットという学びの場は非日常的な風景であった。日常に非日常を取り入れ